スポンサーに対する近代ニュース（続き）

今村蕾橘

「たつみ」誌第一七号にて私は首題の件で拙文を投書致しました。その一、帝人事件で昭和四七年一月二四日の日経の「私の履歴書で現最高裁判所長官石田和外氏(帝人事件)の全文も「たつみ」誌に再録する旨申述べましたが、何かの手違いで脱漏致しましたので茲に改めて記載致し度いのですが、可成りの長文ですので残念ながら割愛致します。是非お読み致し度い方は日経で発行している私の履歴書石田和外㉓《帝人事件》を御購読下さい。

一、日商岩井 世界企業めざす

昭和四七年一〇月九日、日本経済新聞の「企業の焦点」トップは語る日商岩井辻良雄社長、世界企業めざす。強気の計画にも裏付けありて一〇月一日からスタートさせた『第二次三カ年計画』がそれである。全文は可成りの長文なので其結論だけを左に掲げる。

（前略）合併して会社が大きくなればいいという簡単なことではない。当面する激動期を経営者、従業員がどう乗り切るかを考えなければならない。合併のメリットがどうだとか、ましてや、日綿実業と合併するのか—など、今の段階では私（辻社長）の頭の中には一切ない。旧日商は戦前の金融恐慌まで、三井物産と共に日本の貿易をリードした鈴木商店の流れをくんでいる。往年の地位を回復する成算はあるだろうか。他社と比べて、いまのわが社は何となく〝おっとり〟している感は否めない。計画達成の暁には、今の三菱商事、三井物産クラスの半期売上高二兆円台になるのだから、それにふさわしい心構えで進まなければならない。だから社長として社員に特に言いたいのは〝上を向け〟〝夢をもて〟ということだ。今後の三年間で必ずわが社の体質転換を成功させる覚悟だ。

二、クラ運河の建設 タイ、調査を許可 日商岩井など国際会社で推進

昭和四七年一〇月二五日朝日新聞に依れば日商岩井が二四日明らかにした処によると、タイの国家行政審議会（NEC）はこのほど同国国家動力庁（NEA）など関係当局にマレー半島のクラ地峡にクラ運河を建設するための第一次調査を開始することを正式に許可した。この構想は大型タンカーがすれ違い通行できる運河を建設するとともに、港湾・工業基地を造ろうというもの。建設総額は数一〇億ドルと見込まれており資金調達や全体計画を推進するため、欧米諸国や日商岩井をまとめ役とする日本の企業が参加する国際会社を設立する計画である。タイ側は、運河掘削による「核」の平和利用も検討するとしており、構想が実現すれば今世紀最大級の土木事業になる。六〇万トン級すれ違う幅。一〇年越す工事。とのことである。

（以下略す）

私が中学三年の頃、パナマ運河が開通した当時地理の先生が仏人レセップスがスエズ運河を掘り、アメリカ合衆国がパナマ運河を建設して世界歴史に名を残した。諸君若し世界歴史に名を残したければよろしくマレイ半島に運河を掘り給えと冗談半分に云って居たが、やがてそれが実現するような時代と成って来た。誠に感慨無量である。

三、神鋼、ソ連から引き合い 熔接棒プラントなど輸出

昭和四七年一〇月二六日附神戸新聞に依れば神戸製鋼所は二五日、ソ連から熔接棒製造プラントと熔接技術法の輸出商談が寄せられていることを明らかにした。神鋼はこれまで欧州、東南アジアに熔接棒についての幅広い輸出実績を持っているが、ソ連からの商談は初めて。かなり成算があるため、来年には調印にこぎつけたいと準備を進めている。

この商談はソ連の機械輸入公団から寄せられたもので、熔接棒製造プラン一式と造船向けに同社が開発した片面自動熔接技術および熔接装置などが中心になりそう。この種のプラントの場合、最小規模でも一〇億円以上になるという。

神鋼は熔接棒では国内シェアの半分以上を占めるトップメーカー。これまでに世界各国へ熔接装置と技術を輸出している実績を有すると共に現地資本と合弁で現地でアーク熔接棒を生産している。

今回のソ連からの引き合いも、こうした神鋼の実績と技術力を評価したものと、同社は今後の成り行きに期待している。（元日協商事）

〈たつみ 春秋抄〉

木版奇談

黄旗亭

(一)

私の外戚に藤浪吟荘と云う版画の「摺り師」があった。外戚と云うのは伯父の妻の父で一頃私は伯父の事業会社に勤めて居た関係上この吟荘老人とは親しく話を交える機会が多かった。頤(あご)の白髭は綺麗に手入れし、宗匠頭布を離さない端正な老人で慶応三年、東京は向島吾嬬町の生れ、下町育ちの生粋の江戸ッ子で歯切れのいい江戸弁で古い東京の名残りを話してくれるこの大伯父が私は大好きで自慢の長談義を神妙に聞き入ったものだった。若い頃から好きで版画の道一筋を歩みつづけてきたが、関東大震災がきっかけで大阪に住みつく様になりその頃既に七十の坂を越えて居た。江戸末期の数少い伝統芸術の継承者として、如何にも職人堅気丸出しの名人肌で生きて居ればひよっとすると無形文化財に指定されたかもしれない程の価値ある仕事師であった。

昭和十二、三年頃であったか、或る冬の寒い日、老人は突然「お前さん、神戸の鈴木商店に居た事があるって云って居たが金子三次郎さんと云う人を知って居るかい……」と話かけて来た。私は老人の口から意外にも鈴木商店の名が出て来たのでその真意を計りかねたが、好奇の耳を立てて話の続きを待った。かいつまんで要約するとこうである。

「鈴木商店のお家様と先代様とそして大番頭の金子直吉さんの胸像が出来たんだ。大勢の旧社員の皆さんがお金を出し合って昔の御主人や番頭さんに喜んで頂こうとなさったんだな、それでその大勢の方に記念として御礼に御家様と金子さんの直筆の短冊をお送りし様と云う事でそれを私に摺ってくれないかと云われたのが、発起人の金子三次郎さんと云う人なのだ……」。とまあ、ざっとこんな話である。私に取っても因縁浅からぬ事であり、深い関心を呼び起されたので、今度は私の方から老人をつかまえてあれこれ詳しい事をほじくり出す番になった。

(二)

その頃、大阪天王寺に竹村秋峰と云う日本画家が居て、吟荘老人と金子三次郎氏は共に秋峰画伯に画を習って居た同門の合弟子であった。老人は元々好きな道であり、且つ仕事の必要上からも絵筆を止める訳には行かず、三次郎氏は早くから俳句の道に志し、俳画に打ち込んで居られたので云はば趣味の道からの同好の士でもあった。三次郎氏は北区樋の上町の俗に天満溝の側と云う所にある日本食糧会社のえらい人だと云う事で私は老人の頼まれ仕事に便乗して老人と同道、三次郎氏を会社に訪ねた事があった。北区樋の上町は難波橋の北詰附近、中の島の剣先公園の真北の対岸に当る所で、戎さんで有名な堀川が堂島川に注ぐ一角の地点、大阪流に俗称溝の側と呼ぶ。東へ天神橋、天満橋の二つの大橋が架り、その北岸に天満青物市場が三百年の伝統の根を張って居た。その「市の側、九丁目、十丁目筋」は丁度天満の天神さんが御そなわす橋に、青物、乾物特に椎茸の集散で殷賑を極わめ全国でも屈指の大市場、食品問屋の街であった。三次郎氏の日本食糧会社は大川添いの道路に面した二階建の大きな建物で、水利や船便が重要な流通の役目を果たして居た時代で川筋は無数の商店倉庫が櫛比して「だるま」や「団平船」が川を埋めて居た。金子三次郎と云う人はてっきり直吉翁の息子さんだとばかり思って居た私はその時初めて翁とは（令弟金子楠馬氏の娘聟）伯父甥の間柄である事を知らされた。鈴木商店時代は年代も職場もすれ違いではあったけれど話題が店の事になると澎湃として親近感が湧いて来る。後で思えばその頃の金子直吉翁は再起の為に悪戦苦斗の真最中であり、三次郎氏は翁が最も頼りにして居られた一人として常に翁を側面より援助協力して居られたのであった。金子直吉遺芳集に輯録された三次郎氏宛の無数の書翰がその間の消息を如実に物語って居る。

(三)

さて藤浪吟荘は愈々仕事に取りかかる事になった。処で、そもそもこの版画と云うものは絵師、彫り師、摺り師と三位一体となって出来上るものであって、それぞれ多年の修練と独特の秘伝によって工芸の粋をこらし、その精巧な出来栄えは原本に迫るものがある。元画の方は多種多様であるが版木は材質の堅い桜の古木を用い彫り師は一枚の図柄を幾部分にも分けて何枚も寸分たがわず彫り込む。摺り師は又幾枚もの版木を毛筋程の狂いもなく何度も色分けし

て摺り上げる。一枚毎に、絵を画く様に丹念に色付けして「ばれん」と云う円形の薄い金板を竹の皮で包んだ押し型で渾身の力を注いで摺るのである。何枚もある版木の内の一枚ですらも幾通りにも摺り分けるので一枚の画が出来上る迄に何十度摺りにもなる事が普通で極彩色の版画程摺り度数が多い。老人は着物の袖を襷(たすき)でたくし上げ、毛氈の上に筆洗や絵の具皿を順序よく並べ摺り台に版木を万力で固定して徐ろに仕事建をした。今度の短冊の製作は墨一色の文字摺りであるので仕事は割合い簡単だが、それでも濃淡を二、三度にすり分けかすれた処は竹筆を使って一々書く様に墨つけをする。お家様の短冊は上部に細書で、「先人とおのれとの胸像の成るをよろこびて」と添え書きを付けられて

おほけなや、おのがふたりのかほ
かたち、されどもうれし千代にの
こらん　　よね子

とある。美しい水ぐきの後を見つめて居ると温容が目に浮かぶ様である。金子さんの方は有名な

幸に盗人に似ず我が姿
友の恵みの有難きかな　片水

である。墨痕淋漓(りん)として雄渾極りない筆致が躍如として居る。摺り上がって見ると原書とまどうばかり迫真の風格を備えて大した出来栄えである。更に雲漉きの包紙に上わ書をつけ三折りにたたんで納めると立派な美術品になった。木版摺りは前記の様な摺り方をするので桜の堅木と雖も磨滅が甚しく何時の場合でもせいぜい百枚位が限度となる。此の時も短冊はそれぞれ百枚づつ迄の様であった。極月も可成りおしつまった日納品の為め私は再び吟荘老人の介添えとなって金子三次郎さんに面接した。そして老人共々御馳走になったことを憶えて居る。

(四)

幾十年かの歳月が流れた。悪魔の牙に引き裂かれた様な傷痕を残して埋め様のない空白の年月が過ぎた。その傷痕も少しづつ癒えて来た昭和三十五年の夏、心の底にぱっと灯がついた様に辰巳会が誕生した。その年の十月、二百人近い人々が初めて神戸の国際ホテルに会合した時は歴史の足がタイムトンネルを通り抜けて五十年昔に還った様な気がした。感激の波が渦巻く中で私は金子三次郎氏と二十幾年ぶりに再会した。そしてそれ以後の度々の会合や囲碁部の席で顔を合わせる事が多くなるにつれ三次郎さんとの交友が段々深まって行った。そんな時、定まった様に話題になるのは藤浪吟荘の事であった。その老人も既に世を去って居たが……。

大阪梅田の中華料理店で辰巳会の例会が開催された時、偶々、その近所の私の親戚が竹村秋峰の書いた表看板を出して居るので、三次郎さんにその由を話すと態々足を運んでその筆跡の前に佇み徘徊して去るに忍びぬ面持ちで居られた。その三次郎さんも去年二月遂に亡くなられた。八十余歳の天寿を全うされたとは云い条まだまだ余生を楽しんで頂き度かった。辰巳の宝典の様な人であった。ほんとうに惜しいと思う。

亡くなられる数年前、まだ元気で東邦金属へ出社して居られた頃、私は藤浪吟荘最後の遺作「梵雲庵画経」をお贈りした。これは吟荘の盟友淡島観月が向島の梵雲庵秘蔵の四十七仏像を画いた絶品で吟荘翁は画帖風に絵柄に因んで四十七度摺りにしたと云う自慢の作であった。故翁も快心の自作の一部が知友の手に渡った事を心より満足してくれたことと思う。そんな或る日……。

柳田義一氏から奇妙な電話がかかって来た。柳田はんからは毎日定期便の様にかかって来るので珍らしくはないのだがその時の話は少々変って居た「君に見せ度い物があるから一度神戸に来る様に…」と云う。何んな物かと聞いても「来れば判る」とだけ仲々本音を吐いてくれなかったが、とどのつまり「……太陽鉱工の物置きの一隅に古びた板切れが縄でくくって置いてある。何であろうかと調べて見るとそれは正しく版画の版木であった。拓本を取る要領で「ぼんてん」に墨を含ませ取って見ると、昔頒布したお家様と金子さんの短冊の版木だった。何処から何うして太陽鉱工にまぎれ込んだのか誰も知らないが君にゆかりの物と思うから一度見せ度い……と云う。柳田はんは何かの折、私と藤浪吟荘と金子三次郎氏との昔の事を話したのを憶えて居てくれたのであろう。それにしても私は不思議な気がした。

(五)

大体版木と云う物は前述した様に少しでも磨滅すると写しの生命がなくなるので摺り終ったら版木の殆んどは焚き物になる。藤浪家あたりでは年中風呂の焚きものに不自由した事がない位、否むしろ後から後からと使い古しの版木の滞るのに始末に困る程である。版画には生命が宿っても生みの版木は老い朽ちて棄てられる運命にある。皮肉と云えば皮肉な話である。その版木が何うして三十年も経った今、太陽鉱工の物置きから出て来たのであろうか。柳田はんは版木を発見以来好奇心を動かせて叮寧に保管して居て呉れた。見れば正しく吟荘使用の版木である。裏面に幾つかの彫り師の刻印に交って「吟」の刻印があるのはまぎれもなく吟荘使用の証拠である。日を置いて私は三次郎さんにこの訳を話して何うした経路で太陽鉱工から見つかったのであろうかと尋ねて見たが氏も全然記憶がないそうである。考えられる事は短冊の製作後不用になった版木を何時か三次郎さんに届けたものではなかろうか。しかし私にもそんな記憶がない。橋本知一郎氏の話によると「昭和三十一年七月、私と金子三次郎さんと時を同うして、東邦金属に入社した。私はそれ迄中央毛織に居たが、金子さんは日本食品の後羽幌炭坑に居られたのでなかろうか……」と云う。版木が三次郎さんの何かの都合で東邦金属から太陽鉱工へ行ったとしても昭和十二、三年の版木が三十一年東邦金属へ移る迄の二十年間、何処に何うなって居たのやら全くミステリーである。そして時も時、金子直吉遺芳集の編纂の最中こんなものが見つかるとは。私は私だけの解釈で妙に因縁めいた複雑な感じが去来し、何うにも単なる偶然とは割り切れない気がしてならなかった。

話はそれ迄である。亡くなられた橋本隆正氏は棟方志功を愛好せられた。版画にも並々ならぬ造詣を持ち一家言を有して居られた。氏の書画愛好は今更云う迄もない。労災病院でまだ気分もそんなにお悪くない頃見舞に行ってはよく画の話を聞かせてもらった。志功の版画は画も彫りも摺りも皆一人で上げられる処に旧来の版画と異る境地を開拓し価値があった。話し込んで時間が長びきハラハラした事も忘れられない思い出の一つになってしまった。その「大橋本」の遺業を継承して私等が金子直吉遺芳集を完成した一つの裏話に藤浪吟荘老人、金子三次郎氏を書いた迄である。（第二話完）

（四七年十二月）

日経紙「私の履歴書」に われらの会長登場

全国会員の諸兄も之れだけは見落されていないと信じます。会長高畑誠一氏は満八十五才の高齢にもかかわらず去る十月十五日から二十六回に亘り、日経紙「私の履歴書」欄に健筆を振われた。生い立ちから鈴木入り、御結婚から倫敦支店長時代の活躍振り、鈴木破綻から日商の発展に寧日なく、各種の事業の開拓にも寝食を忘れられ、又趣味としてのスポーツ、ゴルフにかけても永年斯界の普及に並々ならぬ貢献された苦心談にその足跡を忍ぶことが出来た。それに一ツ釜を共にして来たわれらの辰巳会の長年に亘る行事にも筆を伸ばされて読者をして恰かも歴史絵巻きに触るる思いがした。

顧みるに高畑会長が大きく世界的に活躍された華かな時代の裏にいた個々の僕らはどこの場所でどんな仕事をして来たことかとおのれのまぼろしを追想し乍ら来る日の紙上を待たれたことであった。物故された金子さん、西川文蔵さん、西川玉之助さん、上田観水さん等の先輩の片鱗も織りこまれていた事が床しく覚えた。

尚飾りっけの無い御性格通りの筆勢は会長の御人柄を克く現わし、自画像の浮彫りの巧くましさに中心より敬服のことばを吝みません（十一月十九日二十六回終りの日）編

あと書

昭和十二年十二月十五日
御胸像三体完成
鈴木岩治郎様　明治二十七年六月十五日亡二十九才
鈴木　よね様　現時　八十六才
金子　直吉様　現時　七十二才
製作　本山白雲
お家様御他界　昭和十三年五月七日　行年八十七才
金子様御他界　昭和十九年二月二十七日　七十九才
六甲　祥龍寺内お家様胸像碑
金子、柳田彰徳碑
昭和二十二年五月　建立
以上
（巽ビル　木畑竜治郎）